

唄い継がれた 「かもめの 鳴く音」



江差には、江差に生まれた文化を大切にし、先人の開拓の苦勞やニシン漁の繁栄の歴史をいつまでも伝えたいという、多くの人々の思いがあふれている。北海道遺産第1回選定の「姥神大神宮渡御祭」と並び、「江差追分」にもその熱い思いが込められている。

江差追分のルーツには諸説があり、研究者は多いものの未だ決定的な定説はない。一説には、250年ほど前に信州中山道にあった馬子唄が越後に伝わり、越後追分となり、やがてニシン漁で

賑わった江差の港に北前船などにより運ばれたと言われている。その追分節が、江差にもともとあった江差謙良節などといえ、長い間、北国の厳しい風土にもまれながら多くの先人たちに唄い継がれ変遷し、独特の哀調を帯びたものとして、現在の「江差追分」となった。

江差追分には、前唄、本唄、後唄がある。前唄も後唄も、本唄の情緒をより高めるためにあり、比較的自由に唄われるが、本唄には基本譜がある。江差追分節がいくつかの流派で唄われていた1909（明治42）年、正調節を作ろうと各派が合意し音符の作成が手がけられたもので、現在の基本譜は1969（昭和44）年にまとめられた。

本唄はたった七節でできているが、そこには人たちの悲喜こもごもの思いがこめられている。もっともよく親しまれている本唄「かもめの鳴く音に ふと目を さまし あれが 蝦夷地の山かいな」は、蝦夷地での大成を

夢見て北前船に乗り込んだ北陸地方の武士や農家の人たちが、かもめの声に目を覚まして蝦夷の山々を目にした時の期待と不安に満ちた心情を唄ったものであり、別の本唄「忍路（オシヨロ） 高島 およびも ないが せめて 歌棄（ウタスツ） 磯谷まで」は、北上



するニシンを追って漁に出る男たちを女人禁制の積丹半島の手前にある歌棄、磯谷まで見送りたいという切ない思いを唄ったものとして有名だ。江差追分を守り、全国、海外に広げているのは1935（昭和10）年に発足した「江差追分会」。2004（平成16）年4月現在で、158支部（うち海外5支部）が組織され、会員数も4000人を超える。

1963（昭和38）年に始まった江差追分全国大会は、平成16年で第42回大会を迎えた。全国各地から集まった約400名が、大会の3日間に「かもめ」の本唄を次々と唄い、その年の優勝者が決定する。少年、熟年、一般の部に分かれており、その層の厚さにも驚く。

江差追分会館では観光客にも江差追分にふれてもらおうと、100畳のホールでの実演や江差追分を学べる道場も開設している。

Data



●お問い合わせ先
江差町追分課（江差追分会館内）
Tel. 01395-2-5555